



トリストラン・コルビエールにおける造語: 異質な語彙の導入と擬-語

著者	小澤 真
内容記述	初出：言語情報科学（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻発行）
引用	言語情報科学（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻発行）．2006，4，P.69-84
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017169

トリスタン・コルビエールにおける造語 異質な語彙の導入と擬-語

小澤 真

要旨

Nous traitons le néologisme de Tristan Corbière, surtout des vocabulaires de pseudo-italien, de pseudo-espagnol, et de pseudo-ancien-français. Ces pseudo-langues sont d'abord fondées sur l'arbitraire graphique, et celui-ci cause l'indécision phonique et aussi l'indécision sémantique. Par exemple, la phrase « Buona nocte » qui imite un vocabulaire italien « notte » est produite selon l'orthographe du moyen âge (« nuit »), et ce mot « nocte » dérangerait des lecteurs. On ne saurait pas comment prononcer le mot ([notte], [nɔt], [nɔkt], ou encore [nɔkte] ?). Et dans un autre exemple « — *Se habla español : Paraque... raquando ?...* » les lecteurs se heurtent à l'incompréhensible sémantique puisque la pseudo-langue n'est que de l'usage individuel du poète. En fait, l'arbitraire graphique, l'indécision phonique et l'indécision sémantique suscitent aux lecteurs un rire moqueur ou un sourire amer. Ce rire jaune assez lyrique cache la réflexion du poète sur la langue.

キーワード：トリスタン・コルビエール，造語，擬-語，書記の恣意性，音声と意味の不決定性

1. トリスタン・コルビエールと造語

トリスタン・コルビエール (Tristan Corbière, 1845-1875) はフランス・ブルターニュ地方出身の詩人であるが、現在その読者は限られている。その唯一の詩集『黄色い愛』(*Les Amours jaunes*, 1873) はブルターニュでの認知度は高いが、フランス全土で考えた場合、その名を知る者も決して多くはない。日本においてはまとまった翻訳すらないという状況である。しかし、彼の詩作品が見せる現代性と「面白さ」のいくつかをここで明らかにすることによってトリスタン¹⁾の価値を問い直すことができるであろう。トリスタンの使用語彙の特徴としては通常の造語²⁾や俗語の使用の他に海事用語やトレ・デュニオン (-) で繋いだ複合語³⁾の多用などが挙げられるが、この論考では特にトリスタンのテキストに見られる同時代のフランス語に存在しない語彙、つまり造語や古フランス語、またイタリア語、スペイン語、英語、ブルトン語の語彙、さらにはそれらを模し

た擬-語の使用などに焦点を当てる。先行研究としてミシェル・ダンセル『トリスタン・コルビエールの言語と現代性』(Michel Dansel, *Langage et modernité chez Tristan Corbière*. A.-G. Nizet, 1974. [préface de P.-O. Walzer]) を挙げておこう。ダンセルはトリスタンの造語にジュール・ラフォルク(Jules Laforgue, 1860-1887)、ジェイムス・ジョイス(James Joyce, 1882-1941)、レイモン・クノー(Raymond Queneau, 1903-1976)らに繋がる現代性を見ているが、それだけではない。

ところで「造語」とはそもそも何であろうか。フランス語では« néologie »ないし« néologisme »がここで述べる「造語」にあたるだろう。TLFによると« néologie »とは「語の創造、新しい表現、また既成の言語に新しい言語を導入すること」であり、「新たな語彙単位を形成するプロセス」⁴⁾である。また« néologisme »もほぼ同様の語義で使用されるが、精神分析学の用語として「音から、また語や通常の語の断片の融合によって作られた新しい単語であり、患者がある種の錯乱状態にあるときに使用する」⁵⁾とされる。通常の言語学的用語としては任意の言語集団における流用性が考慮されているが、精神分析学の用語としては基本的に個人言語であるとして考えられている。トリスタンの造語は後者に近いものが比較的数量多く存在する。次にフランス語における造語の歴史を、外国語からの借用を中心に簡単に振り返ることにしよう。

2. フランス語史における造語

そもそも言語が常に変化するものであるならば、造語の起源を問うことは不可能である。17世紀以前のフランス語は流動的であり、造語、外国語からの借用語なども多い。ピーター・リカードによれば16世紀はイタリアからの借用語は460を数えた⁶⁾。文学における造語ないし借用語は16世紀以前から既に前衛的、あるいは実験的な様相を呈している。15世紀の『パトラン先生』において錯乱したかに見せかけたパトラン先生が様々な方言で話す部分は、すでにフランソワ・ラブレー(François Rabelais, 1483?-1553)を予感させる⁷⁾。続いて現れるラブレーの試みは造語を諧謔と哲学の交じり合ったひとつの芸術にまで高めている⁸⁾。韻文においては音綴数の規制もあり、散文ほどの放埒な造語使用は不可能であるものの、ピエール・ド・ロンサール(Pierre de Ronsard, 1524-1585)、また他の16世紀の詩人たちがこうした造語の試みを行っている⁹⁾。しかし16世紀と19世紀の例を単純に比較することはできないだろう。それは言語的な状況が異なり、17世紀以降の比較的固定した言語上の規則、また韻文上の規則の元でこうした試みを行うことには別の意味があるからである。

17世紀には16世紀までに増殖した造語が規制された。これにはヴォージュラ(Vaugelas, 1585-1650)¹⁰⁾などが一役買っていたことは周知の通りである。方言、専門用語などは文学言語においては避けられ、借用語などは比較的少数であった。フランス語への影響という点ではスペイン語が重要であった¹¹⁾。

18世紀に入ると多くの造語がラテン語とギリシア語から作られ、借用語は英語からのものが多かった¹²⁾。しかし高尚なジャンルとしての文学(詩や演劇)ではこうした語彙は相変わらず避けられた¹³⁾。

19世紀においてはヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) やアルフレッド・ド・ヴィニー (Alfred de Vigny, 1797-1863) がラテン語、スペイン語、イタリア語、英語から語彙を借用し、オノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) がロシア語やトルコ語の語彙などを加えおり¹⁴⁾、またジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-1876) やギイ・ド・モーパッサン (Guy de Maupassant, 1850-1893) もテキスト中に方言を使用した¹⁵⁾。ここではテオフィル・ゴーチエ (Théophile Gautier, 1811-1872) の『エスパーニャ』 (España, 1845) からスペイン語の語彙借用の事例を引用する。

Or, pendant que j'errais dans la vaste fonda,
Attendant qu'on servît *la olla podrida*,

« En passant à Vergara »¹⁶⁾

そして、広いフォンダをうろうろしながら、
スペイン風シチューができるのを待っているあいだ、

「ヴェルガラに立ち寄りて」

« olla podrida » については既にリトレにも見え、フランス語の内部に定着していたと見るべきであろう¹⁷⁾。この語は現代フランス語として今なお使用されている。「fonda」はスペイン語で安宿という意味である。こうした使用例はゴーチエにはほとんど発見できないだろう。19世紀における外国語の韻文中への挿入は、固有名詞に関しては広範に用いられたものの、普通名詞に関しては稀である。少なくともトリスタンのように造語や借用語を濫用とまで言いうるほどに酷使した詩人はいなかった。

トリスタンの造語は様々なものが存在する。この論考ではとくに形態的な独創性を持つ造語、とりわけ同時代のフランス語以外の言語に関わる造語に限って分析した。たとえば既存の語に新たな意味を付与するというタイプの造語は重要ではあるが、紙幅の関係から割愛する。これは詩や文学の根幹に関わる問題をも孕むものであるため、機会を改めて論じるべきである。またいわゆる海事用語の使用や複合語の多用もトリスタンの特徴であるが、これについてもここでは扱わない¹⁸⁾。

3. フランス語以外の言語体系から採用された語彙

英語、古フランス語、ラテン語、スペイン語、イタリア語やブルトン語の挿入についてはどうであろうか。次にトリスタンの唯一の詩集である『黄色い愛』集中における特

殊語彙をまとめた表を掲げる。この論文ではトリスタンの造語、とくにフランス語以外の外国語に関連した語彙に関して主に分析しているために、造語の分類に関して便宜的にいくつか項目を立てた。すなわち「ラテン語」「スペイン語」「英語」「ブルトン語」「イタリア語」「古仏語」「擬-スペイン語」「擬-英語」「擬-イタリア語」「擬-古仏語」「フランス語造語」「擬-ラテン語」「その他」である。「擬-語」とはある言語体系の語彙にはないものの、その言語体系の語彙を模して造語されたと思われる語彙である。この擬-語に関しては形態的な面で前例がないものを取りあげた。しかし、この表の分類は万全とは言えないであろう。なお、ラテン語・スペイン語・英語・イタリア語などにおいてフランス語の語彙として認識されていたと思われるものは除外した。

トリスタン・コルビエール『黄色い愛』における特殊語彙

ラテン語	Benedicite (Un riche en Bretagne), Deus misericors (Cris d'aveugle), Panem nostrum (Un riche en Bretagne), Secundum ordinem (Chapelet), Stella maris (Le bossu Bitor), Vide latus (La rapsode foraine), Vesper, amoris Aurora (Litanie)
スペイン語	capitan (Point n'ai fait ...), Sangre Dios (Grand opéra), español (Chapelet), se habla (Chapelet), Hermosa (Après la pluie), Todas-las-santos (Chapelet), Todos los santos (Le renégat), navaja-Dolorès-y-Crusificcion (chapelet)
英語	English (Après la pluie), railway (I sonnet), spoken (Après la pluie), Yankees (Le bossu Bitor)
ブルトン語	Ankokrignets (La rapsode foraine), Kakous (La rapsode foraine), TUPETU (Saint Tupetu), Tu-pe-tu (Saint Tupetu), cornandon (Un riche en Bretagne)
イタリア語	aurora (Litanie), CON PULCINELLA (Soneto a Napoli), Diavolo (Soneto a Napoli), è pur si muove (Veder Napoli poi mori), Lasciate speranza (Veder Napoli poi mori), Mazanielli (Veder Napoli poi mori), morbidezza (Veder Napoli poi mori), Buona sera (Do, l'enfant, do ...), picciola (Le fils de Lamartine et de Graziella), Pulcinella (Soneto a Napoli), Santa-Pia (Soneto a Napoli), signor (Le fils de Lamartine et de Graziella)
古仏語	hyver (Au vieux Roscoff), ouïr (Grand opéra, Litanie du sommeil), bugle (Cris d'aveugle), saltin (Naufrageur), morgate (Le naufrageur)
擬-スペイン語	Ascencion (Chapelet), Carambah (Grand opéra), Castagnoles (Le poète contumace, Elizir d'amor), cigaro (Grand opéra), Crucificcion (Chapelet), gracia (Grand opéra), circuncion (Chapelet), paraque (Chapelet), perfeccion (Chapelet, 古仏にも同綴が存在), raquando (Chapelet), gendarm' qué jé r'grette (Aurora)
擬-英語	Pompeïa (Vésuves et Cie)

擬-イタリア語	éd' (Bambine, ?), far-niente (Libertà), Maz'Aniello (Soneto a Napoli), BUONA VESPRE (Do, l'enfant, do ...), Buona nocte (Do, l'enfant, do ...), tarentela (Soneto a Napoli), vespre (Chanson en si)
フランス語造語	Anspeck (Le bossu Bitor), Brandezingue (Idylle coupée), chibouck (Litanie du sommeil), Clyso-pompant (Veder Napoli poi mori), Et cœtera (Steam-boat), f...tre (Bambine), Hosannah (Insomnie), qué jé (Aurora), jûn' (Matelot), Kerlouans (Le naufrageur), kh'ôl (Déjeuner de soleil), Noukahiva (Le novice en partenance), graziellant (Le fils de Lamartine et de Graziella), ruolze (Veder Napoli poi mori), crochard (Le bossu Bitor), etc.
擬-ラテン語	Plangorer (A une Demoiselle), matruele (Le bossu Bitor)
その他	Lamma (Cris d'aveugle, アラム語), Sabacthani (Cris d'aveugle, アラム語)

* 詩行中にあらわれる語彙に限る

この他特殊なアクセントを持つもの (tûra (Un jeune qui s'en va), Tournôirais (Chanson en si), païrai (Le poète et la cigale) や省略書法 (mat'lot (Bambine), p'tit (Cap'taine Ledoux), prim' (Bambine), gendarm' (Aurora), r'grette (Aurora), r'lâchés (Cap'taine Ledoux), roul' (Aurora), sopran' (Le fils de Lamartine et de Graziella), soulag' (Bambine) などがある。「フランス語造語」の欄には比較的伝統的な作り方をしている造語を挙げた。

特殊語彙の主なものとしてラテン語、ブルトン語、スペイン語、イタリア語、古仏語が挙げられる。ダンセル¹⁹⁾が分析するように、トリスタンのテクストにはパリ・イタリア・スペイン・ブルターニュが場所に関する主題として現れており、そのためにブルトン語、スペイン語、イタリア語が多用されている。ラテン語や古仏語という古い語彙は彼の17世紀以前の文学への共感を見ることができよう。同時代である19世紀の詩人よりも先に述べた『パトラン先生』やラブレ、フランソワ・ヴィヨン (François Villon, 1432-1464?) の作品への参照や愛着が見て取れる²⁰⁾。

こうした特殊な語彙の使用は、希少価値の高い語彙を常に探し求める詩人としては当然と言えよう。フランス語以外の言語からの借用語は異国趣味の表現であるが、フランス語として意味が通じなくなってしまう危険性を孕んでいる。ラテン語・イタリア語・スペイン語などの挿入はある程度の知識を持つ読者を想定するならば、意味の伝達は可能であるが、ブルトン語の場合はそれほど容易ではない。ブルトン語は16世紀に見られたようなフランス語方言の借用ではなく、別の言語であることを考慮せねばならない。『黄色い愛』がパリで出版されたことを考えると、ブルトン語の語彙は多くの読者には理解されなかったであろう。あたかも意味の空隙をひとつの効果として狙ったかのようである。

— *Miserere pour les ripailles*
Des Ankokrignets et Kakous !...

« La rapsode foraine et le Pardon de Sainte-Anne »²¹⁾

アワレミタマエ、
アンコクリニエとカクの宴を！ ...

「縁日の女吟遊詩人と聖アンヌのパルドン祭」

« Ankokrignets » はブルトン語で「死に蝕まれた者」、« Kakous » はライ病患者を指す。一種の不可触民であるライ病患者はおそらく十字軍参加者にその起源があり、ここにもトリスタンの中世趣味を窺うことができる。時にトリスタンはこうした語彙に注や説明を加えることがある。「Saint Tupetu de Tu-pe-tu」では詩行の前の長いエピグラフで« Tupetu » というブルトン語の語彙を解説している²²⁾。このような説明がない場合、トリスタンは読者を韜晦する語彙を意識的に選んでいると言えるだろう。

仮にスペイン語、イタリア語を解さない読者を想定したとしてもこれらの言語はロマンス語としてのフランス語話者にとって、その綴りから語義の類推が困難ではない場合がある。むしろブルトン語が読者にとって問題となるだろう。ブルトン語の挿入は説明もなく行われる場合には読者は意味の理解も音声としての発話も困難である。こうした語彙が大抵の読者には読解不可能であることをトリスタンは知悉していたはずであり、意識的なものであるとすることができる。

4. 個人言語としての擬-語

さてトリスタンの文体的特徴としてとりわけ我々の注意をひくものは、イタリア語、スペイン語や古フランス語を模して創作された造語であろう。便宜的に本論では「擬-古フランス語」、「擬-イタリア語」と呼ぶこととする。まず擬-古フランス語の例を挙げる。

C'est une rapsode foraine
Qui donne aux gens pour un liard
L'Istoyre de la Magdalayne,
Du Juif-Errant ou d'Abeylar.

« La Rapsode foraine et le Pardon de Sainte-Anne »

それは縁日の女吟遊詩人
たかだか1リヤール²³⁾で人々に聞かせる

まぐだらのまりやはなし、
彷徨えるユダヤ人やあるいはアベイラールのはなし²⁴⁾を。

「縁日の女吟遊詩人と聖アンヌのパルドン祭」

イタリックで強調された部分、「Isoyre」、「Magdalayne」、「Abeylar」はトリスタンが古フランス語風に作った造語である²⁵⁾。現在の正書法では「Istoyre」、「Magdalayne」、「Abeylar」はそれぞれ「histoire」、「Madeleine」、「Abélard」（ないし「Abailard」）と綴られる。この交差韻8音綴の詩節では「Istoyre」を「Histoire」とし、「Magdalayne」を「Madeleine」とした場合でも音綴上の数は同じであることから、こうした造語が音韻上の理由からもたらされたものではないことが予想される。そうした形式上の理由ではなくて、ここでは単に文体的効果を狙ったものと言えよう。この内「Madelaine」と「Abélard」は固有名詞である。ところでこの「Magdalayne」に近い綴りは『パトラン先生』の中に見出すことができる。ひとつは「Me cousta, a la Magdalene,」（「聖マグダラ祭には[銀貨八枚も]しました」, v. 251）であり、今ひとつは「M'envo[y]e la sainte Magdalene,」（「聖マグダラ様がおいらに[罰を]下されちまわ」, v. 309）である²⁶⁾。文学作品においてしばしば作者の意図的なものであるか否かに関わらず、固有名詞が変形され使用されるケースがあるが、「histoire」は普通名詞であり、使用頻度も高い語であることから変形される例はほとんど見当たらないだろう²⁷⁾。

擬-古フランス語の文体的効果とはいかなるものなのか。「histoire」という語は古フランス語のテキストには「hystoire」、「ystoire」などの綴りで表記され、ラテン語の「historia」に由来している。この内最もトリスタンの「Istoyre」との類似が認められるのは「ystoire」、「ystoyre」であろう²⁸⁾。「i」と「y」が逆転して綴られるという現象は中世末期に見られたもの²⁹⁾である。形態的側面だけではなく、この古風でパロディ化された綴りには通常の「histoire」とは異なるニュアンスがある。このような綴りは読者にどのような印象を与えるだろうか。ブルターニュの聖アンヌのパルドン祭の賑わいのさなか、語り部が昔話をして金銭を稼ぐ場面で、いかにも古い時代の伝承であるかのごとく開陳する語りは、綴りの恣意性により、来歴が怪しいものにされている。敢えて「histoire」という単語を古語風に「Istoyre」と改めるなどの見せかけも行う、半ば詐欺師のような吟遊詩人の姿が想像できるだろう。

トリスタンのテキストにはイタリア語が使用されることも多いが、ここでは特に擬-イタリア語が使用された例として「Do, l'enfant, do...」を挙げよう。

DO, L'ENFANT, DO...

BUONA VESPRES! Dors : Ton bout de cierge...

On l'a posé là, puis est on parti.

Tu n'auras pas peur seul, pauvre petit ?...

C'est le chandelier de ton lit d'auberge.

Du fesse-cahier ne crains plus la verge,

Va !... De t'éveiller point n'est si hardi.

Buona sera ! Dors : Ton bout de cierge...

Est mort. — Il n'est plus, ici, de concierge :

Seuls, le vent du nord, le vent du midi

Viendront balancer un fil-de-la-Vierge.

Chut ! Pour les pieds-plats, ton sol est maudit.

— Buona nocte ! Dors : Ton bout de cierge...

眠れよ子供 ...

ブオナ・ヴェスプレ！ 眠れ、お前の蝋燭の終わり ...

彼はそこに置いて行かれた。

ひとりでも恐くないよね、かわいそうなボク？

ほら、お前さんの宿のベッドにある、蝋燭立てさ。

くそつたれな写字生の鞭なんてもう恐がるなよ、

往け。... 目覚めるほど大胆なことはない。

ブオナ・セーラ！ 眠れ、お前の蝋燭の終わり ...

は死んだ。—— ここには、もう、管理人もいない。

ただ、北風と、みなみ風が

蜘蛛の糸をゆらしに来るだろう。

しっ！ ろくでなしどものために、お前の土地は呪われた。

—— ブオナ・ノクテ！ 眠れ、お前の蝋燭の終わり ...

第1詩行に現れる「VESPRE」はイタリア語を擬した造語である。形態的にフランス語で類似する語彙は「vêpres」であろう。これは宵の祈りである「晩課」を意味する。イタリア語の語彙「vespri」も同様の意味を持つ。だが文脈から第7詩行の「Buona sera」（イタリア語で「こんばんは」）とほとんど同じあるいは近似的な意味であると解することができる。ただし、フランス語の「晩課」というニュアンスは含まれるだろう。この詩篇は子守唄であると同時に祈りでもあるのだ。眠る子供への子守唄は「死んだ」子供への子守唄としての祈りを喚起する³⁰⁾。「蜘蛛の巣」（「fil-de-la-Vierge」）という複合語が含む「聖母マリア」（「Vierge」）への祈りであろう。しかし第11詩行で転調され、そうした祈り＝子守唄も抑えられる。「Chut」（「しっ」）という間投詞は沈黙を要請するために発せられる³¹⁾。韻文は朗読され歌われるべきものであるにも関わらず、小声で呟くことを求められているのだ。「Pour les pieds-plats, ton sol est maudit.」はそのように密かに発せられた呪いあるいは祈りである。

しかし最終詩行はティレと感嘆符によって再び転調し、「Buona nocte !」という声のはっきりと発音される。この「nocte」という語はやはり最初の詩行と同じくイタリア語を擬した造語であり、イタリア語の「notte」（「夜」）の最初の「t」を「c」と交代させた形である。この形態的な交代は古語からの連想だろう。中世以来、ある語彙が語源風綴り字を保存していることがある。これはフランス語の語彙を語源（正しい語源でないこともある）の綴りに近づけようと綴りを変えるものであった³²⁾。16世紀には「nuit」をラテン語「noctis」に近づけ「nuict」と綴る例が見られる³³⁾。トリスタンはこうした例を踏まえて「nocte」という語を造り出したのかもしれない。ただしここではフランス語でなくイタリア語「notte」から派生させるという恣意的な操作が行われている。また仮にフランス語をしか理解しない理想的な読者を想定したとしても、フランス語における「nuit」（「夜」）からの連想により「Bon nuit」（「おやすみ」）の意であることは容易に理解できるだろう。ここでは「c」の存在により「nocturne」（「夜想曲」）といった語彙が想起されるが、憂いを含んだピアノの嘆きを、失笑を喚起するかもしれない錯乱気味の造語に乗せて表現している。

スペイン語を擬した語彙についても擬 - イタリア語の場合と同様のことが言えるだろう。スペイン語語彙、擬 - スペイン語の語彙を多く含む詩篇「ロザリオ」からその最終詩節を引用する。

Mais, ô *Quasimodo*, tu ne viens pas encore ;
 Pour casse-tête, hélas ! je n'ai que ma mandore...
 — *Se habla español : Paraque... raquando ?...*

« *Chapelet* »

でも、おおカジモド、あなたはまだ来ない。

棍棒のために、嗚呼！ 私にはマンドーラしかありません…

——セ・アブラ・エスパニョール、パラケ… ラカンド？…

「ロザリオ」

おそらく祈りながら何かを待っている女性の嘆きが歌われている。カジモドは直前の詩節では「白衣の祝日」の意で使用されているが、引用部ではユゴーの小説の登場人物であるかもしれない³⁴⁾。ブルターニュでは白衣の祝日に食器を壊す習慣があり、棍棒で壊すものはマンドーラという古楽器しかないという意味であろう。そう仮定するならばこの女性は歌い手であるかもしれない。最終詩行は誰の台詞であるのかもはっきりしない。「*« Se habla español »*」はスペイン語として一応は「スペイン語が話される」と解することができる。「*« Paraque »*」はスペイン語における「*« para qué »*」（「何のために」）であろうか。次の「*« raquando »*」は動詞「*« rascar »*」（「かき鳴らす、ひっかく」）の現在分詞形であるという説は受け入れてもよいだろう³⁵⁾。以上のように仮定すれば「スペイン語が話されている。何のために（何かを）かき鳴らしているのですか？」、つまり誰かが歌い手に「あなたはスペイン語の歌を歌っているのだが、それは何のためなのか？」と尋ねたのかもしれない。この詩篇ではスペイン語ないしスペイン語まがいの語彙が多く出現しているのだから、これは自虐的な嘲りである。しかしいかに解釈しようとも読者は納得できないだろう。詩人は自らの歌を紡ぐためにスペイン語を求めているが、そのスペイン語というのは伝達ができないほどに崩されたものである。一方で自嘲しているかのようでありながら、同時に独善的な個人言語が理解に苦しんでいる読者を嘲弄しているかのようである。

これら擬-語はほとんど個人言語であるために普遍的な意味に回収されない。ある程度の類推は許されるものの、語義の決定は曖昧なままである。ブルトン語は個人言語ではないが、パリの一般的な読者にとっての語義把握の困難を考慮するならば、これに準ずることができるだろう。またこれらの語彙はしばしば読者にとって発音することすら難しい。仮に理想的なフランス語、古フランス語、イタリア語を共に解する読者を想定してみよう。その場合「*« Istoyre »*」と綴られた語は古語風の発音が要求されるのか。「*« Buona nocte »*」はどのように発音されるのか（[*notte*], [*not*], [*nokt*], あるいは [*nokte*]）。読者はこうした個人言語の異様な綴りを前に困惑し、発音（または発話）が躊躇われるであろう。発音すること、あるいは韻文であるにも関わらず朗読することが拒否されている、という印象を受けるかもしれない³⁶⁾。こうしたトリスタンの個人的な造語は書記の恣意性により意味的・音声的な不決定性を必然的に伴う。このうち音声における不決定性は「歌われること」（詩における聴覚的側面）を疑問に付し、意味の不決定は通常の伝達手段としての言語そのものを疑問に付してしまうだろう。トリスタンの造語の性

質として「書記の恣意性」とそれに由来する「意味の不決定性」、「音声の不決定性」が挙げられる。

トリスタンの擬 - 語はその意味の欠如および音声の欠如によって読者は困惑させられる。詩という特殊な環境であるとはいえ、伝達手段であるはずの言語がここでは可能な限り伝達しないという役割を負っている。残るものはテキストに書きつけられた「何かを意味するであろう」語であり、「何らかの発音を持つであろう」と予想されるアルファベットの連なりだけである。こうしたトリスタンの造語のひとつの狙いは書記・音声・意味をめぐるひとつの実験でもあるのだ。

5. 結び

この小論ではトリスタンの多用する造語、とりわけ外国語や古語などを模して形態的に変化させられた語彙について考察した。個人言語である擬 - 語は形態的な変化ばかりではなく、意味的・音声的な変化をも蒙っている。通常朗読されるべき韻文で書かれたからには、音声の問題は重大な違反である。トリスタンのテキストが提示する「書記の恣意性」、およびそれに由来する「意味の不決定性」、「音声の不決定性」は伝達手段であるはずの言葉を極力伝達させない手段にしているように見える。その意味で現代的であったとすることもできるだろう。しかしただ実験的であったというだけではない。

16世紀の造語が流行した状況とは異なり、19世紀の相対的に固定した語彙を「改造」することは詩人たちが許さなかつただろう³⁷⁾。この世紀にこうした造語を濫用することによって、読者の失笑や場合によっては反感を買うかもしれないことは明らかであった。トリスタンの造語への愛着は流行への反抗とすることもできる。

だがトリスタンが造語に執着した理由はそれだけではない。彼の造語が読者に要求するのは豪放な笑いではなく、困惑によって引き出された苦笑や失笑である。こうした微妙な笑いの裏に、真摯な言葉への洞察を、豊かな抒情性ととともに隠している。16世紀の陽気な巨匠とやり口は異なっている、造語が普遍的な魅力を持ちうることをトリスタンは教えてくれるだろう。

註

- 1) トリスタン・コルビエールを指す場合、以後トリスタンという呼称を使用する。これは父エドアール・コルビエール (Édouard Corbière, 1793-1875) との混同を避けるという理由による。
- 2) 例えば次の例。

Commandaient et rossignolaient à l'unisson...

« Bossu Bitor »

(甲板員の合図は) 命令を下し、いっせいにナイチンげえる ...

「せむしビートル」

ここで動詞として使用されている « rossignoler » という単語はトリスタンの造語でナイチンゲールを意味する « rossigol » の動詞形であることはすぐに了解できる。こうした突飛な造語は「不真面目さ」の印象を与え、笑いを起こす文体的工夫であると言える。なお一般的に動詞の造語は形容詞などの造語に比べて稀である。

3) 例えば次の例。

Sur ses jambes en pieds-de-banc-de-cabaret,

« Bossu Bitor »

(酔っ払い) 飲み屋 = の = 椅子 = の = 脚の足で (帰ってきた)

「せむしビートル」

この種の複合語を一語であると見なすならば、例文のように韻文としても破格である。伝統的に必ず強勢のあるはずの6音綴目も一つの語の先頭であるために強勢をかけることができない。またジョセフ・デジャック (Joseph Déjacque, 1822-1864) など複合語を多く用いた作家と比較することで、トリスタンの政治思想への両義的なスタンスも垣間見ることができよう。

- 4) *Trésor de la langue française*, Centre national de la recherche scientifique, Nancy, 1971-1983. [sous la direction de Paul Imbs] t. II. p. 82. « Création de mots, de tours nouveaux et introduction de ceux-ci dans une langue donnée. », « Processus de formation de nouvelles unités lexicales ».
- 5) *Ibid.* p. 83. « Mot nouveau crée soit à partir de sons, soit par fusion de mots ou de fragments de mots usuels, et utilisé par un malade dans certains états délirants. »
- 6) Cf. ピーター・リカード (伊藤忠雄・高橋秀雄訳) 『フランス語史を学ぶ人のために』世界思想社、京都、1995. p. 129.
- 7) *Maître Pathelin dans Recueil de farces* (1450-1550). Droz, Genève, 1993. t. VII [Textes établis, annotés et commentés par André Tissier]. 少なくとも最初の版であるルロワ版 (Édition Le Roy. BN. Rés.p. Yf 417) は1485年と推定。
- 8) ラブレーは既に散文においてであるが、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、他の外国語や俗語、方言などを取り入れている。『パンタグリユエル』 (*Pantagruel roy des Dipsodes*, 1532) では登場人物パニユルジュをして様々な言語で語らせ、『第四の書』 (*Le quart livre des faicts et dictz Heroique du bon Pantagruel*, 1548,) 第15章では morrambouzeuezen gouzequomorguatasacbacquevezinemaffresser (「毆る」) といった長

大な語を作り出した (Rabelais, *Œuvres complètes*. Gallimard, Paris, 1994. [Bibliothèque de la Pléiade, édition établie, présentée et annotée par Mireille Huchon, avec la collaboration de François Moreau] p. 574.)。 Cf. L. Sainéan, *La langue de Rabelais*. E. de boccard, 1922-1923. t. II. pp. 94-231.

- 9) ロンサールおよび16世紀の作家の造語のリストは次を参照されたい。 Cf. Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française : des origines à nos jours*, A. Colin, Paris, 1906. t. II. pp. 188-197.
- 10) フランスの文法家。上流社会のフランス語を規範とし、増えすぎた語彙の緊縮を図った。
- 11) Cf. U.T. ホームズ・A.H. シュッツ (松原秀一訳) 『フランス語の歴史』大修館書店、東京、1974. p. 130.
- 12) Cf. リカード, *op.cit.* p. 165-166.
- 13) Cf. 山田秀男 『フランス語史』駿河台出版、東京、1994. p. 144.
- 14) Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française : des origines à nos jours*, A. Colin, Paris, 1968. t. XII. [l'époque romantique par Charles Brunot, bibliographie établie par Yves Le Hir]. p. 381.
- 15) Cf. ホームズ・シュッツ, *op.cit.* p. 163.
- 16) Théophile Gautier, *Émaux et camées. texte définitif (1872) suivi de poésie choisies*. Édition Garnier Frère, Paris, [1954, avec une esquisse biographique et des notes par Adolphe Boschot]. p. 267.
- 17) « olla-podrida » : « Mets nationale de l'Espagne, consistant en un assaisonnement de plusieurs viandes cuites ensemble dans un pot » (「いくつかの肉を一緒に鍋で煮たもので味付けしたスペインの郷土料理」) dans Emile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Gallimard/Hachette, 1962. t. 5. p. 1002.
- 18) 技術用語として韻文に頻出するものは農業用語である。海事用語に関してはアナトール・フランス (Anatole France, 1844-1924) なども用いているが、極めて限られている。トリスタンは「海の男」(« Gens de mer ») の章を中心に海事用語を多用している。
- 19) Michel Dansel, *Tristan Corbière. Thématique de l'inspiration, L'Âge d'Homme*, Lausanne, 1985. ダンセルは『黄色い愛』とトリスタンの書簡が提示するイタリア・スペイン・パリ・ブルターニュについて検討している。
- 20) テオドール・ド・バンヴィル (Théodore de Banville, 1823-1891) は中世の形式であるロンドーなどを使用しており、トリスタンを参照した重要な詩人でもある。しかし形式においてむしろヴィヨンなどとの親近性はトリスタンの方が強く持っている。 Cf. 小澤真 『トリスタン・コルビエールの韻律』立教大学修士論文、2004.
- 21) トリスタンのテキストの引用は次の版による。 Tristan Corbière, *Les Amours jaunes*, Presses universitaires du Mirail, Toulouse, 1992. [texte établie et commenté par Elisabeth Aragon et Claude Bonnin].
- 22) トリスタンによれば « Tupetu » とはブルターニュの聖人の名前であるがブルトン語で「一

方でまた他方で」という意味。このように詩行中に現れる語彙に対して自ら注を付すことをトリスタンは厭わない。例えば「*Le novice en partenance et sentimental*」において「*mathurin*」という語に対し「*Dumanet maritime*」（「見栄っ張りの船乗り」）という注を付している。

- 23) 1 リヤールは4分の1スー。わずかな金額。
- 24) ピエール・アベラル（Pierre Abélard, 1079-1142）は神学者・哲学者。
- 25) 古語法（archaïsme）とは厳密には異なる。古語法とは「過去に使用されていたが現在使用されない語を使用すること」である。ここで問題にしている擬-古フランス語とは過去に使用された形跡がなく、古語風の綴りによって造語された一種の造語（ないし新語）である。
- 26) ティシエは前述した書中においてふたつのバージョンを採用している。拙論本文中の引用はルロワ版（Edition Le Roy, 1485年頃）。ルロワ版と同年代成立とされるラ・ヴァリエール草稿（Manuscrit La Vallière : BN. 25 467,）では次の通り。「*Je poyray à la Magdalaine*」（v. 241, p. 211 dans l'éd. de Tissier）；「*M'avoit la sainte Magdalaine*」（v. 301, p. 218）。
なお「*Madelaine*」の綴りのヴァリエーションはゴッドフロワによれば次のものが確認できる。-ainne, -eine, -aigne, -egne, -ene, -enne, -oïne, -oinne, -oigne, mada., magde., magda., mase., maze., maza., mauze. (Frédéric Goderoy, *Dictionnaire de l'ancienne langue française*, Slatkine, Genève, 1982. t. 5. p. 62, col. 1.)
- 27) 19世紀では既に固定した綴りが自明のごとく受け入れられ、これに対する違反は（少なくとも詩人にとっては）ほとんど非常識であっただろう。ジョゼ＝マリア・エレディア（José-Maria Hérédia, 1842-1905）は書簡において「あなたは私の名前のHが省かれて書かれるなんてことがあるとでも思いますか？」（「*Voyez-vous mon nom écrit sans H...?*」）と述べ、シュリー・プリュドム（Sully Prudhomme, 1839-1907）は「日常的な綴り字改革はおおよそ、侵犯のごとく詩人を脅かす[...]。言語の番人たちは卑劣にも *lys*（ユリ）という語の気高き *y* を切断しておいて、彼らが繊細な文学の魂に引き起こすであろう正当な憤慨を思わなかったのだろうか？ 彼らは *y* の下にはみ出した部分を儉約するために美学を犠牲にしたのだ」（「*toute réforme de l'orthographe usuelle fait horreur au poète comme un attentat [...]. Les gardiens de la langue, qui ont traîtreusement amputé le noble y du mot lys, ne se doutaient donc pas de la légitime indignation qu'ils exciteraient dans l'âme des lettres dédicats ? Ils ont sacrifié l'esthétique à l'économie d'un jambage*」）と述べている（Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française : des origines à nos jours*, A. Colin, Paris, 1968. t. XIII, 1. [l'époque réaliste par Charles Brunot]. p. 327.）。
- 28) DEAFによれば「*ystoire*」の綴りは *Le Roman de Florimont*, par Aimon de Carenes (ms de BN fr. 15101, 13e s.-) や *Chanson d'Aiquin* (ms de BN fr. 2233, ms tardif, 15e s.) の他 10 例程度確認できる。また「*ystoyre*」の綴りは *Anticlaudian*, adaptation libre de *l'Anticlaudianus*

- d'Alain de Lille (ms de BN fr. 17177, 13e s.) の 292 番に 1 例あることが記載されている。
Cf. Kurt Baldinger : *Dictionnaire étymologique de l'ancien français*. I3-I4, Neimeyer, Tübingen ;
Presses de l'Université Laval, Québec, 2003. [sous la direction de F. Möhren] « istore » col. 472.
- 29) Cf. ホームズ・シュツツ, *op.cit.* p. 79. « i » を « y » と表記する綴りはロンサールが一時的に廃止したが、すぐにこの改革を諦める (ホームズ・シュツツ, *Ibid.* p. 98)。現代フランス語のごとく i と綴られるようになるには 18 世紀を待たねばならない (山田, *op.cit.* p. 151)。
- 30) « mort » や « bout » という語が死を含意している。
- 31) « Se dit pour demander le silence » (*Le Petit Robert*, « chut »)。
- 32) Cf. 山田, *op.cit.* p. 86.
- 33) « nuict » という綴りの例は多い。例えば Philippe Desportes (1546-1606) : « Nuict, mère de soucis, cruelle aux affligez ... » (「夜は気がかりの母、傷ついた者たちに残酷な ...」 : *Les premières oeuvres de Philippes Des-Portes*, M. Patisson, Paris, 1600 [Cf. <http://gallica.bnf.fr/>], p. 142) など。デポルトは他の詩篇でもこの « nuict » という綴りを多用している。
- 34) Victor Hugo, *Notre-Dame de Paris*. Charles Gosselin, Paris, 1831.
- 35) エリザベート・アラゴンおよびクロード・ボナンによる。Tristan Corbière, *Les Amours jaunes*, Presses universitaires du Mirail, Toulouse, 1992. [texte établie et commenté par Elisabeth Aragon et Claude Bonin]. p. 179.
- 36) ブルトン語を理解しない読者がブルトン語の唐突な挿入に出会った場合も同じであろう。
- 37) 注 24 を参照。

参考文献

辞典・事典類

- Baldinger (Kurt) : *Dictionnaire étymologique de l'ancien français*. I3-I4, Neimeyer, Tübingen ; Les Presses de l'Université Laval, Québec, 2003. [DEAF. sous la direction de F. Möhren].
- Godefroy (Frédéric) : *Dictionnaire de l'ancienne langue française*, 10 v. Slatkine, Genève, 1982. [1ère éd. F. Vieweg, Paris, 1891-1902].
- Huguet (Edmond) : *Dictionnaire de la langue française du 16ème siècle*. 7 v. M. Didier, Paris, 1925-1967.
- Littre (Emile) : *Dictionnaire de la langue française*. 7 v. Gallimard/Hachette, Paris, 1956-1971. [1ère éd. 1863-1872, Hachette].
- Le Petit Robert*. Dictionnaires Le Robert, Paris. 1993. [1ère éd. 1910]
- Trésor de la langue française*, 16 v. Centre national de la recherche scientifique, Nancy, 1971-1983. [TLF].
- Wartburg (Walter von) : *Französisches etymologisches Wörterbuch : eine Darstellung des*

galloromanischen Sprachschatzes. 25 v. J.C.B. Mohr, Tübingen, 1922-1970. [FEW]

欧文

- Brunot (Ferdinand) : *Histoire de la langue française : des origines à nos jours*. 21 v. A. Colin, Paris, 1926-1934.
- Corbière (Tristan) : *Les Amours jaunes*, Presses universitaires du Mirail, Toulouse, 1992. [texte établie et commenté par Elisabeth Aragon et Claude Bonnin].
- Dansel (Michel) : *Langage et modernité chez Tristan Corbière*. A.-G. Nizet, 1974. [préface de P.-O. Walzer]
- : *Tristan Corbière. Thématique de l'inspiration, L'Âge d'Homme*, Lausanne, 1985.
- Desportes (Phillipe) : *Les premières oeuvres de Philippe Des-Portes*, M. Patisson, Paris, 1600. [Cf. <http://gallica.bnf.fr/>].
- : *Élégies*. Droz, Genève ; Minard, Paris, 1961. [Édition publiée par Victor E. Graham, « Textes Littéraires Français »].
- : *Diverses amours et autres œuvres mêlées*. Droz, Genève ; Minard, Paris, 1963. [Édition publiée par Victor E. Graham, « Textes Littéraires Français »].
- Gautier (Théophile) : *Émaux et camées. texte définitif (1872) suivi de poésie choisies*. Édition Garnier Frère, Paris, [1954, avec une esquisse biographique et des notes par Adolphe Boschot]
- Hugo (Victor) : *Notre-Dame de Paris dans Notre-Dame de Paris : Les Travailleurs de la mer*. Gallimard, 1975. [textes établis, présentés et annotés par Jacques Seebacher et Yves Gohin, « Bibliothèque de la Pléiade ». 1ère éd. chez Charles Gosselin, Paris, 1831].
- Maître Pathelin dans Recueil de farces (1450-1550)*. Droz, Genève, 1993. t. VII [Textes établis, annotés et commentés par André Tissier].
- Rabelais (François) : *Œuvres complètes*. Gallimard, Paris, 1994. [Bibliothèque de la Pléiade, édition établie, présentée et annotée par Mireille Huchon, avec la collaboration de François Moreau]
- Sainéan (L.) : *La langue de Rabelais*. E. de boccard, 1922-1923. 2 v.

邦文

- 小澤真 : 『トリストラン・コルビエールの韻律』立教大学修士論文、2004.
- ホームズ (U.T.)・シュッツ (A.H.) (松原秀一訳) : 『フランス語の歴史』大修館書店、東京、1974.
- 山田秀男 : 『フランス語史』駿河台出版、東京、1994.
- ラプレー (フランソワ) (宮下志朗訳) : 『ガルガンチュア』筑摩書房、東京、2005.
- リカード (ピーター) (伊藤忠雄・高橋秀雄訳) : 『フランス語史を学ぶ人のために』世界思想社、京都、1995.